

市民 プレス

SHIMIN PRESS

4月5日 第48号

発行人 特定非営利活動法人
「市民フォーラム」

編集人 原 昭二

制作・印刷 デジタル工房

FAX 048 (476) 9111

〒353-0004 埼玉県志木市本町 5-19-15

市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN

<http://shimin.camelianet.com>

CONTENTS

-PAGE 1

新座の風光・爛漫の春
第13回「わがまち新座」写真展

新座市文化協会第5回文化講演会

-PAGE 2,3 星野半右衛門がつづった
幕末期の引又 島田公男

-PAGE 4

地域情報：志木第九の会定期演奏会
盛会で終わり、次回の演目決まる

細田千虎さん逝く



本多二丁目 竹内 博（写真クラブGセブン）2007年

「わがまち新座」写真展から



東二丁目-4

吉野正男（写光会）2007年

新座の風光



栄4-1 国家公務員宿舎建設現場

文屋錦二（フォト・セブンセブン）



馬場3-6

市場坂橋より市営墓地を望む
小島昭三（畑中写真同好会）

今回のテーマは

爛漫の春と桜花

新塚 栄小学校裏 緑道に散る桜花

宇田陽子（フォトサークル虹）



野火止7-8 山崎邸の満開の桜 大樹を撮る

大畑恵代子（写真クラブPhoto2000）



→ 小暮裕子
（MASAKA写真クラブ）
2007年
大和田三丁目 氷川神社



新座写真クラブ交流会は、加盟7団体が撮影した写真を持ち寄って『わがまち新座』写真展を開催、本年度は去る二月七日から『いぎほことぶらね』で。

えるが、7団体が撮影した写真は、例年、アルバムにまとめて新座市に寄贈され、同市中央図書館で市民がいつでも閲覧できるよう保管される。

「新座の今を」 明日のあなたに・・・

キャッチフレーズは、
「新座の今を」
明日のあなたに・・・
宅地化が進み、武蔵野の面影が消えてゆく現状や新しく生まれた街並みなどを記録して未来に残そうという趣旨で始められたこの展示会は今年13年目を迎

交流会の構成は畑中写真同好会、写真クラブGセブン、MASAKA写真クラブ、写光会、フォト・セブンセブン、写真クラブPhoto2000、フォトサークル虹の七団体で、それぞれ新座市の各地域で活動している。

新座市文化協会第5回文化講演会

新座の今昔 その3 昭和から平成へ 『寺院と神社』

去る1月23日「いぎほことぶらね」で開催された講演会では、会長 笹倉 強さんの挨拶で始まり、新座市教育委員会 斯波 治さんの司会でパネルディスカッションが行われた。招かれたのは、金鳳山平林寺 松竹寛山副住職、野火止氷川神社 石山信昭宮司のお二人で、普段市民は外からしか見えない寺院と神社について、親しく解説された。



星野半右衛門がつづった 幕末期の引又

島田 公男

はじめに

現在の志木市本町のほぼ全域にあたる地域はかつて引又宿と呼ばれ、江戸時代後期から明治の時代にかけて朝霞・志木・新座とその周辺地域の経済活動の中心地として繁栄しました。

星野半右衛門は、文政8年（1825）に白子宿（現和光市）の名家富沢家の次男として生まれ、引又宿で名主役を務めていた星野家に養子に入りました。そして22歳から名主役を務めるなど引又宿の政治に重きをなす一方で、農業、地主、質屋経営、寺子屋経営等を行い、引又の経済の一翼を担っていた人物です。この半右衛門による日記が、嘉永5年（1852）～安政2年（1855）、安政4年（1857）、及び明治8年、明治11年～明治13年の分について今日まで残されています。彼が青年期・壮年期を送った嘉永から安政にかけての日記は、彼の身の回りで起こった様々な出来事が克明に記されており、志木地方の幕末の様子を知る貴重な史料となっています。

一面のいくつかを取り上げてみたいと思います。

商家女性の江戸行き小旅行

江戸時代は封建時代であり女性には虐げられていたと思われがちですが決してそんなことはなく、むしろ現代よりもまだ天照大神以来の伝統が残っていて、自由闊達に人生を楽しんでいた時代のようになっています。

半右衛門日記の中に女性に関する面白い話がいろいろ出てきますが、半右衛門の養母の多と妻ちかがよく泊りがけで出かけていることに気がきました。実家に数日～十日間程度帰ることも多いのですが、それ以外に、江戸によく出かけています。

以下に養母と妻の江戸行について記述された箇所を挙げます。

嘉永6年4月15日

○おちか並びに栄之進商人義今夜早船にて江戸行、尤も新河岸望月氏母様矢張り早船にて江戸へ御出の趣。

同4月21日

○おちか並びに栄之進商人義今夜四つ半頃帰り。但し新河岸早舟に乘来り、引又河岸迄花川戸中村屋老母わざわざ送り呉れ候由。

嘉永6年12月22日

○今朝義早舟に乗り江戸より帰る。

嘉永7年10月23日

○母義早船にて江戸へ行。同10月29日

○朝、母義早船にて江戸より帰宅いたし。

安政元年12月13日

○母義早舟にて江戸へ行。同12月17日

○朝五つ時、母義江戸より早舟にて帰宅いたし。

安政2年12月13日

○見世の金三両相渡し母江戸へ行。

安政4年1月13日

○三上伊太郎女房はる義、不儀の始末之有り、今夜早舟にて江戸表へ遣し、但し我ら母同道にて行。御老中堀田様御屋敷へ奉公に上候。

同1月21日

○母江戸より帰宅いたし。

女性が一人で、あるいは女性と小児だけで、困難無く江戸を行き来していたことがわかります。どこに、何をしに行つたのだろうかとか疑問に思いますが、日記には書かれていせんので推測してみたいと思います。

妻ちかと息子栄之進が二人で出かけている、最初の嘉永6年4月15日付けの「新河岸望月氏母様矢張り早船にて御出の趣」という記述と、4月21日帰宅時の「花川戸中村屋老母わざわざ送り呉れ候」という記述にヒントがありそうです。ちかの実家は新河岸現川越市）の望月氏で、「綿善」と呼ばれていた豪商です。ちかは実家の母に誘われて一緒に出かけているようです。当時の花川戸は現在の台東区花川戸二丁目近辺に当たり、東武伊勢崎線浅草駅と松屋デパートあたりから浅草寺と隅田川の中間のあたりです。斉藤貞夫著「川越舟運」によれば「花川戸には「藤屋」「嶋屋」「中村屋」の三軒の間屋が川越舟と取引があつた」とあり、中村屋は新河岸の綿善の取引先と想像されます。綿善の女将とその娘と孫の三人は浅草花川戸の取引先宅にお世話になつたか、その近辺の旅館に宿泊したのではないのでしょうか。

浅草は当時大変な盛り場です。花川戸から目と鼻の先の猿若町（現浅草6丁目）は当時芝居小屋が軒を連ねており、さながら江戸のブロードウェイです。祖母、母、孫の三人連れで芝居見物を楽しんだことが考えられます。浅草はまた、観音様始めお寺の多い町です。神社仏閣への参詣もしたでしょうし、浅草だけでなく江戸は物見遊山のパラダイスです。なお、江戸ではありませんが、ちかあるいはのゑが栄之進を伴つて岡村現朝霞市）の不動尊や大宮の水川神社などによくお参りにいつていることは、日記に度々出てきます。

一方、養母のゑは12月13日から12月21日頃にかけて江戸に出ることが多く、日記が残る幕末分全ての年でこの時期に出かけています。川崎村（現ふじみ野市）の名家である日出間氏から嫁いだのゑは、星野家のお内儀として、あるいは日出間家の娘として親類・知人・商売先等への挨拶廻りや年末の商用に行っているものと想像します。滞在期間も短くないので、ついでに観劇物見遊山も楽しんだのでは

ないでしょうか。安政2年12月13日の記録には「見世の金三両相渡し」とあり、これが商用旅行であることを示すのかどうか検討の余地がありそうです。

安政4年1月13日の江戸行は、引又に住む三上伊太郎の女房お春が不義事件を起こして所払いになり、お春を江戸の奉公先に連れて行く役目です。老中堀田様とは駐日米国総領事のハリスに修好通商条約を突き付けられて四苦八苦したあの堀田正睦です。安政4年1月は、堀田正睦が条約の勅許を得る為に上洛するちょうど1年前になります。それにしても、人妻の不義に対するお仕置きが上級武家屋敷への奉公というのは、現代の私達が思う江戸時代の常識と一見ずれているような気がしますが、しかし考え直してみるとなるほどと思う良い対応に思えます。また、のゑが堀田屋敷にどういつてがあつたのか、知りたところでは

上は知人宅に泊まっています。江戸の知人が年始に半右衛門宅を訪れた際に、のゑ宛にお年玉を渡す記述なども複数あることから、江戸にはのゑと親しい関係にある知り合いがあつたことが想像されます。前述の花川戸の中村屋老母との関係を見ても、江戸・引又・川越をカバーする商家女性のネットワークがあつて互いに行き来していたと見ることが出来ると思います。

これらの江戸往來の記録をみて気がつく事は、ほぼすべてに「早舟にて」又は「早船にて」と書かれていることです。女性でも気楽に江戸との行き来ができるのはこの早舟のお陰と思われます。新河岸川舟運が乗客を運ぶようになったのは天保年間からと言われていますが、この時期早舟は夜に引又を出て、翌朝に江戸に着いています。この便は、新河岸（現川越市）を出発して途中の引又等で客を乗降させながら川を下つていったことが嘉永6年4月15日の記述からわかります。江戸から帰る便についても、徹夜で運行し朝に引又に着いていたことが分かります。嘉永6年4月21日にちかと栄之進は深夜に帰宅しておりますので、深夜に引又に到着する便もあつたものと思われる。

お春さんの家出事件

江戸との行き来やその際に早舟を利用することが一般的だったことの例として、引又の豪商三上権兵衛の娘、お春の家出事件が面白いので取り上げてみたいと思います。三上権兵衛は、商売や酒造業などを手がけている豪商兼実業家であり、半右衛門とは村役人仲間、日頃から親しく付き合つて

お見通しで、半右衛門らはお春さんの足取りを追々聞き取り調査しながら、早舟を先回りして歩いて千住に向かい、早朝4時頃に到着して船宿で早舟が来るのを待ちます。

嘉永6年12月12日

○明七つ半より八百八殿方にて待ち居り候処、朝四つ時新河岸早船にてお春どの下女共商人



晩年の星野半右衛門と孫娘

（『志木市史別編』より）

明治10年代初め頃のものと思われます。

乗来たり候間取押え、八百八殿方にて食事等いたし、杜氏は宿元へ知らず為として引又へ遣し。お春殿・下女・我ら・作次郎都合四人八百八殿方より屋根舟に乗り日本橋迄行、此の舟賃金壹分外に酒代貳百文遣し。但し江戸橋より上り室町伊勢屋四郎兵衛殿へちよつと立寄り、それより馬喰町貳丁目武蔵屋仁兵衛と申す旅籠屋へ行き泊り。

早船は10時頃千住に到着、半右衛門らは首尾よくお春さんと下女を取り押さえ、一緒に朝食を取ります。お春さんは駄々を捏ねたのでしうか、連絡の為に杜氏を引又に帰しただけで、下女のおさきさんも連れて4人で屋根舟に乗って日本橋に向かいます。舟賃に金壹分は高額です。屋根舟は、時代劇でよく悪代官が強欲商人と「山吹色」を受け渡したりするのに使う、あの舟です。半右衛門はお春さんのために奮発したのでしよう。酒代貳百文は、二人前なのか四人前なのか気になります。浅草、両国と江戸の風景を眺めながら大川（現隅田川）を下り、永代橋の直前で日本橋川に入っ

て、日本橋の少し手前の橋の江戸橋にて舟から上がります。そして「室町伊勢屋四郎兵衛にちよつと立寄」とあります。伊勢屋四郎兵衛は半右衛門が懇意にしている友人あるいは取引先で、住所は室町三丁目です。当時の室町三丁目は三井越後屋の本店があつたところで、現在の三井本館がある区画と中央通りを挟んだその向かいの区画にあたります。日本橋の中でも一番の中心街です。お春さんはそこでウインドウ・ショッピングでもしたのでしょうか。そして室町三丁目から中央通りを神田方面

に向かい、東に折れて少し先の馬喰町の旅籠屋へ行きます。馬喰町は当時、旅籠屋がずらりと並んでいた旅宿街でした。

嘉永6年12月13日

○武蔵屋仁兵衛方に右四人滞留致し、今八つ半時引又より塚本善左衛門殿遣わされ候、御同人武蔵屋来泊まり。

この日も江戸滞在です。午後3時頃に引又から使いがやつて来ました。使いの塚本善左衛門は三上権兵衛から何を言い付かつて来たのでしょうか。お春さんと下女のおさきさんはこの日はまるまる一日、江戸の街を楽しんだものと想像します。天気は「曇り 夜大雨」と日記に記載されています。

嘉永6年12月14日

○右五人にて武蔵屋方罷り居り候処昼八つ半時引又より飛脚来り、我ら義に使いの者同道にて帰り呉れ候様申越し候間、我ら義暮れ六つ時より使者と同道にて爰元出立、室町へ立ち寄り帰宅致し。途中夜四つ半時白子太郎左衛門方へ来り酒を呑む、それより引又へ九つ時過ぎ帰宅、直ぐに三上氏へ参り。

死亡の記録一覧表

死亡日	氏名	性別	分類	年齢	死因
嘉5年 11/10	向の紺屋藤七殿母お磯	女	老母	71 歳	
嘉 5/12/22	横町石屋長吉	男			病死
嘉 6/1/2	上町紺屋太郎右衛門殿弟音五郎	男			病死
嘉 6/2/23	上町紺屋亭主次郎吉	男	亭主	44 歳	
嘉 6/6/4	上町鍛冶屋初五郎女房	女	女房		
嘉 6/6/11	萬作屋駒藏女房	女	女房		
嘉 6/7/4	水子村山下山田屋左平次殿老母	女	老母		
嘉 6/9/2	医師小川乾斎	男			
嘉 6/9/20	下女その実家の祖母	女	老母		
嘉 6/11/23	星野屋音次郎	男		50 歳	
嘉 7/1/15	西川鉄五郎殿響四郎兵衛	男		26 歳	病死
嘉 7/3/1	井下田藤左衛門殿内儀おこと	女	内儀	33 歳	狐に憑かれ
嘉 7/3 月中	上町田中屋清八	男			病死
嘉 7/3/22	新河岸綿屋和助	男		30 歳	病死
嘉 7/5/7	当町藤屋清五郎	男		70 歳	中風
嘉 7/5/17	柏屋弥右衛門仲弥吉	男	仲	30 歳	気違い縊死
嘉 7/5/20	白子富沢林蔵殿母	女	老母		病死
嘉 7/6/15	山崎子之助	男		70 歳	
嘉 7/閏 7/11	舟大工千太郎殿母	女	老母		
嘉 7/閏 7/12	伊勢屋三蔵	男			
嘉 7/8/19	新河岸望月母のお婆	女	老母	90 歳	
嘉 7/10/23	上町和泉屋庄右衛門の男子	男	小児	6 歳	
嘉 7/10/31	上町半十郎	男		77 歳	
嘉 7/11/24	大和屋七蔵	男		74 歳	
嘉 7/11/27	鍛冶屋金兵衛殿小児		小児		
安 1/12/29	前番人の小児		小児		
安 2/2/19	白子の半右衛門継母	女	老母	66 歳	
安 2/2/20	三浦屋朝五郎殿小児		小児		疱瘡
安 2/3/8	三上権兵衛殿小児およね	女	小児	8 ヶ月	疱瘡
	以降、日記は約半年間欠落				
安 2/11/21	三上弥平二殿弟	男			
安 2/12/7	三上文平殿仲又兵衛	男	小児	7 歳	急病
	以降、日記は約一年間欠落				
安 3/12/31	白子富沢繁右衛門方嫁	女	嫁		
安 4/2/15	萬年屋丑蔵方無宿人	男			持病
安 4/3/6	上町松田屋岩次郎母	女	老母		
安 4/3/24	下町屋七郎右衛門殿母	女	老母	80 歳	
安 4/4/4	上町鍛冶屋金兵衛殿女房	女	女房		
安 4/4/25	河岸中野屋老母	女	老母		
安 4/5/7	上町石屋弥十郎弟喜三郎	男		14 歳	
安 4/閏 5/18	三上重兵衛殿孫むら	女	小児	4 歳	
安 4/6/8	西川武左衛門殿家内くめ	女	家内	51 歳	
安 4/7/14	角萬おなつ	女			
安 4/8/9	藤屋清五郎殿方老母	女	老母		

人は武蔵屋に泊まって翌日に帰つた、と読むことも出来ると思ひます。本当はどちらだったのでしょうか。以下、事後談があります。

嘉永6年12月24日

○三上元次郎殿来り、お春二件の礼として貳百足出し候えども、返し候。

嘉永6年12月27日

○夜三上内儀おまき殿来り、同人方お春どのの礼当二十四日元次郎殿より遣わされ候処、その節相返し候処、今夜又とお巻殿を以つて遣わされ候に付き受納いたし、但し金貳百足。

三上元次郎は三上権兵衛の息子、おまきは三上権兵衛のお内儀です。お礼を渡す、いや受取らないというやり取りまで記録されています。一疋は十文ですので、式

百足は二千文になります。当時、日雇いの日当が二百文程度ですので、6万円〜10万円程度だと思います。屋根舟の舟賃と宿泊代を差し引くと持出しになると思ひます。

読者のみなさんは既にお気付きかと思いますが、この家出事件を起こしたお春さんは、前項の不義事件のお春さんと同一人物です。お春さんはこの家出事件の1年半後に星野半右衛門の仲人により結婚し、その約2年後に前項で述べた不義事件でまたまた星野家のお世話になったのでした。

平均寿命と死亡の原因

女性の生き様の次に、人々の亡くなり方を取り上げてみます。半右衛門日記には、誰々がいつ死去

し葬は云々、という記述が散見されます。半右衛門の付き合ひの範囲、あるいは耳にした範囲で書かれているものと思ひます。死亡時の年齢が記されている箇所は少ないのですが、ある程度の数はあるので平均寿命の参考値くらいは出せるかと思ひます。また、死亡の原因が書かれている箇所もありま

す。死亡原因が一覧出来るような史料は珍しいのではないかと思います。表に纏めてみました（「死亡の記録一覧表」参照）。

死亡年齢が分かっている人について平均を計算します。男性は12名で、平均寿命は41・5歳、満年齢では40・5歳となります。女性

多いように見受けられます。但し壮年をすぎて70歳以上生きる方も少なくありません。女性については、全女性20人中「老母」に分類される方が11人いて、そのうち年齢が分かっている方は3人だけ

です。不明の方の年齢が分かれば計算上の平均寿命がもつと延びるはずで、上記の表を見る限り、乳幼児の死亡数が少ないように感じます。もし生まれた直後に死亡した場合に葬式をしないなどの事情があつたとすると、それが半右衛門の日記に書かれないという可能性があります。

嘉永7年の秋から翌安政2年の春にかけて多くの小児と高齢者が集中的に死亡しています。異国船と共にやつてきたコレラが江戸・関東地域に大流行するのは安政

5年のことですので、コレラとは違う病が流行したものと思ひます。2名の小児については「疱瘡」と記されています。多くの小児と老人が次々と亡くなるという流行病の恐ろしさを感じます。死因を「病死」としているものが目立ちますが、これは葬儀等の知らせをそのまま書いた結果ではないかと想像します。今日私達が「病氣療養中」ところ・・・を見て「病死」と書くようなものと思ひます。「狐に憑かれて」というものもありま

す。この表現は、当時の一つの病

死因欄を見て気付くのは、壮年の死亡が多いにもかかわらず「事故死」が一件も無いことです。ご存知のように現代の20歳台〜40歳台前半の死因は事故死と自殺が病死を圧倒しています。現代は歩いていても危険、車に乗ればなおさら危険、電車や飛行機に乗るのは命懸けという時代です。こ

う言うには検証が必要ですが、死因の観点からみれば幕末の志木は現代よりも安全・安心な社会だったと言えないでしょうか。また自殺についても「気違い縊死」が一件あるだけです。現代はストレスに満ちています。当時はストレスが無かつたとは言えないまでも、現代のように人々を追ひ詰めるほどの厳しさは無かつたのではないかと想像します。

おわりに

以上に述べたことは、半右衛門が見聞し体験したこと二端です。半右衛門の日常は、年中行事の遂行、公務、役所からの呼出への対応や出張してくる役人の応対、訴訟の調停、次々と持ち込まれる相談事の対応、（次ページへ）

